

子どもたちに夢を
与えたい、叶えたい――



株式会社
ワクワークイングリッシュ

3回目の今回は、市民活動からさらにもう一步踏み込んだ活動をされている方のご紹介です。弱冠 25 歳、現役の大学院生にして、フィリピンの現地の若者 5 人と共に立ち上げたオンライン英会話レッスン事業「WAKU-WORK」の代表を務める山田さん。11 月の中頃に取材をお願いしたにもかかわらず、顔は日焼けで真っ黒！それもそのはず、最近ほとんどフィリピンに滞在しているそうで、今回運良くお話を伺うことができました。若くして異国の地で起業するに至ったきっかけと、その思いとは――

◆フィリピンとの「出会い」は偶然の産物

山田さんが大学に入ったばかりの頃、年に何回も訪れてしまうほど夢中になった場所は、意外にもフィリピンではなく、飛行機のチケットの関係で偶然訪れたサイパンだったとか。

「そのサイパンで遊んでいるときに、声をかけてきたビーチボーイの一人がフィリピン出身だったんです。」

聞けば彼は家族のためにサイパンに出稼ぎに来ていて、20 年も家族と離れて暮らしているとのこと。「幸せの在り方ってなんだろう？」と疑問に思うと同時に、彼の「俺の国を見てこい」の一言でフィリピンに強い興味を抱くようになっていた。

◆「子どもたちの夢をかなえたい」という思いと、これまでの「援助」や「支援」の限界、オンライン英会話の発想

その後、フィリピンへの語学留学の機会を得た山田さんが、現地で目の当たりにしたのは、貧しさから、夢を持つことのできないストリートチルドレンや貧しい子どもたち。

「子どもたちに夢を与えたい、夢をかなえたい。」

その強い思いと、元来のスポーツ好きが高じ、フィリピンで盛んなバスケットボールを通じて、子どもたちと交流を図るようになった。子どもの親からは、「子どもの笑顔が見られるようになってうれしい。」という声の一方で、「今日一日子どもが遊んでいたせいで、お金を稼ぐことができなかった。その分のお金を払ってくれ。」という切実な声も。

またちょうどその頃、ODAの視察でバングラデシュへ訪れる機会に恵まれたが、そこで目にしたのもやはり、援助や支援が本当にそれらを必要としている人たちのところまで届いていない現状だった。

「遊びではなく、お金を生みださないという意味が無い。」「援助の方法として、これまでとは違ったアプローチの仕方があるのではないか。」

いつしかそんな疑問を抱くようになっていた。滞在中に仲良くなった現地の学生にその思いをぶつけてみたところ、彼から返ってきた提案が「オンライン英会話」だった。彼は大学で英語教育を学んでおり、英会話学校でのアルバイト経験もあったのだ。この提案を受け、山田さんは起業への道を進んでいくこととなる。

◆起業への葛藤と決意「自分が子どもたちの代弁者になる」

ただ、そんな山田さんも大学院入学時には、

「大学院に入学して、中途半端に関わるのであれば、フィリピンのみんなに迷惑だし、やめよう。」
と思ったことも。

しかし、学校へ講演に来ていた元世界銀行副総裁の西水さんの「気付いた人がやらなければ、変わらない。」「あなたたちは気付いたのだから、やるべき。」という言葉に背中を押され、
「自分が現地の人の代弁者になる。」

という思いの下、2009年4月にWaku-Workを設立。準備期間には、YOKOHAMA SOUP（横浜社会起業応援プロジェクト）やNEC社会起業塾（横浜市・NEC・ETICなどが協働で実施）に参加、横浜を拠点に活動する社会起業家の先輩にも出会った。5月にはトライアルレッスンを開始し、10月には法人登記、フィリピンでオフィスも借りて正式スタートすることとなる。

◆これから活動を始めようとしている若者にメッセージ

今でこそ社会起業家として注目を集める山田さんも、「社会起業家」という言葉を知ったのは大学院に入ってからだとか。

「最近、活動のきっかけとなる原体験が抜けたまま、社会起業家になることや社会貢献をすることが目的になっている人が多い」



と山田さんは指摘する。NEC 社会起業塾では、「なぜそれをやりたいのか、なぜこの方法なのか、本当の問題がどこにあるのか」を、実体験をもとに徹底的に考える必要があることを学んだという。

「なぜ起業しなければならないのか、なぜ英会話レッスンなのか、なぜ、なぜ、なぜ」と自分に問い直す毎日。

「大変な作業だったけど、今の自分の礎になっています」

一方で、社会起業家になることがすべてではないとも語る。

「政府や大企業でも社会貢献できることはあるし、むしろそういった組織でないとできないこともある。もし一度企業に勤めたとしても、社内で活かしきれないスキルを、社外の社会貢献活動に活かすこともできると思いますよ。」

実際、Waku-Work の一部のシステム構築は、大手企業に勤めるプロフェッショナルボランティアに手伝ってもらったとのこと。ボランティアの方にとっても、このような社外の活動が、社内の仕事へのモチベーションにも繋がっているそうだ。

◆ 思いはあくまでも「子どもたちのために」

今年に入ってから、英会話に限らず、NGO で支援を受けていた若者を Waku-Work で訓練、雇用する取り組みを始めた。これまで支援を受けていた若者を雇用することで、その分の支援を他の子どもたちに回すことができるようになるとともに、「支援の出口」を広げることで、若者や子どもたちの将来の自立と夢の実現に役立っていきたいそうだ。

現地の人たち自身が Waku-Work の事業を担っていけるシステムを整えた上で、将来的には、大好きな地元湯河原の地域活性化に携わりたいとのこと。中学時代の恩師とともに、「地域から社会を変える」と題した、中学生向けの講演会を地元湯河原で開くなどの取り組みもしている。今年9月からは、6ヶ月間の予定で湯河原中学校の適応指導教室にワクワーク英会話レッスンが正式に導入された。

「子どもたちが、英会話を通して異なる文化に触れることで、日本語では表現できないことを、英語で表現できるようになったり、少しずつ変わってきているんです。」

と、嬉しそうに語る山田さん。

国は違っても、「子どもたちのために」という思いは変わらないようだ。

